

奈良女大家政

戸田 卯子

○ 樋泉 優子

中川 早苗

【目的】現代の人々の衣生活を眺めると、量的には充足しているにもかかわらず購買意欲は衰えるところを知らない。日本衣料管理協会の調査による研究報告などからも明らかなように、その管理や収納場所の狭さからなどから、退蔵衣服が問題になっている。そこで本研究では、購入した衣服を着用の有無へと導く要因を探るために、特に衣服購入時・着装時における選択基準の重視度に焦点をあて、これらと購入後の評価〈満足・不満足〉および着用の有無との関連を考察した。第1報では外出着・普段着別に購入時・着装時の選択基準の重視度を世代別に明らかにするとともに選択基準の構造を検討した。

【方法】近畿圏に居住する満18才から70才までの女性720名を対象に1990年10月から11月、配票留置法による質問紙調査を行った(525名回収、回収率72.9%)。主な質問項目は衣服の購入時・着装時における選択基準(外出着・普段着別)の重視度、生活関心事・衣生活満足度・退蔵衣服の割合などである。データの分析には単純集計・クロス集計および因子分析を用いた。

【結果】外出着と普段着の選択基準の重視度を比較すると、外出着では自分の好きな色、柄、デザインであるなど外観性に関する項目、普段着では手入れが簡単であるなど実用性に関する項目で重視度が高かった。購入時・着装時ともに外観に関する項目は各世代とも同様に重視しているのに対し、実用性に関する項目でより高い世代が重視するなど世代間に有意な差が見られた。購入時・着装時における選択基準の因子分析を外出着・普段着別に行った結果、外出着各3因子、普段着では購入時2因子・着装時3因子を抽出した。